

## &lt;論 説&gt;

## 周防地方の民具から見た犁耕伝来の2つの波

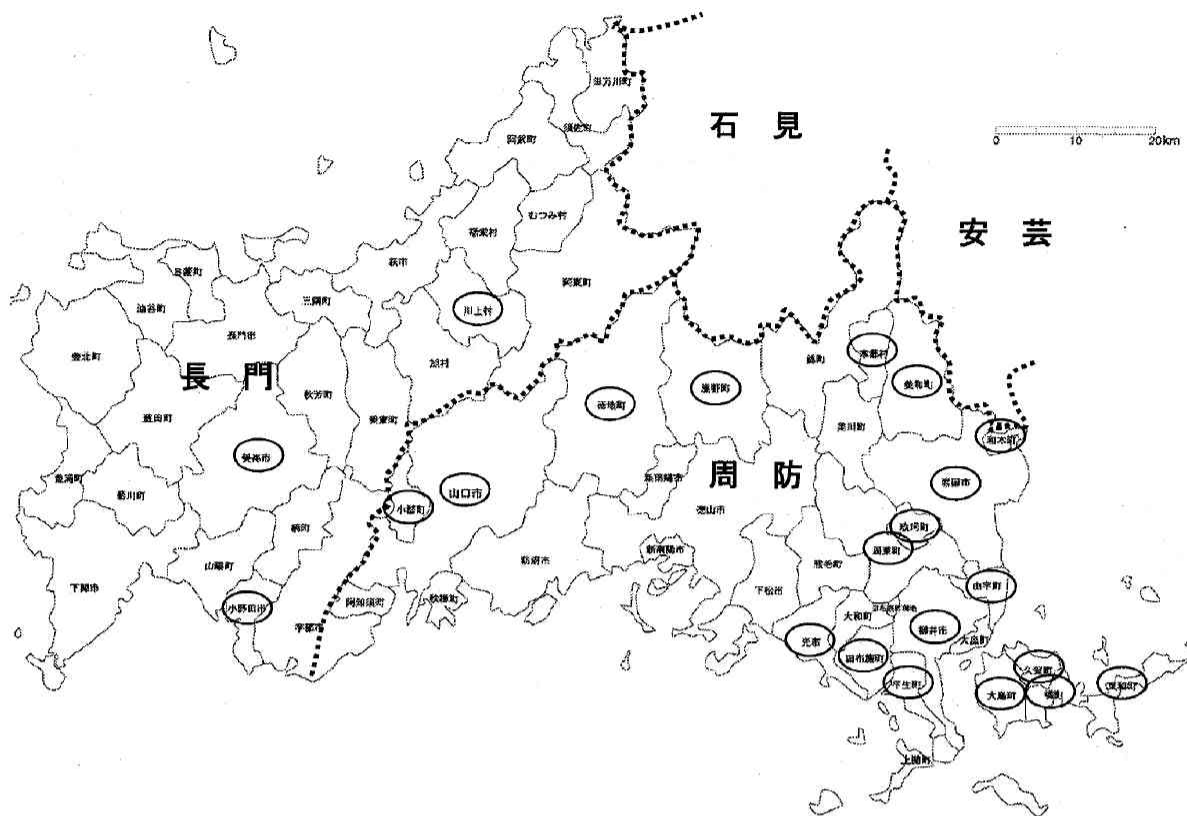
河 野 通 明

## はじめに

本稿の目的 [図1] で見るように、私は1989年に山口県の市町村の博物館・資料館を2度に分けてまわって首木・鞍の調査をおこなった。これは先に調査した紀伊半島のウナグラと呼ばれる首かせ付き首木が朝鮮系であり、6世紀に朝鮮系渡来人が朝鮮系無床犁を持ち込んでいたことの痕跡と認定したことをうけて、日本でもう1カ所ウナグラという呼称をもつ山口県東部の首木の実態把握のための駆け足調査であった。ところがここでウナグラと呼ばれていたのは[図2]のような「引綱の稜線渡し」を伴う「くの字形首木」(「引綱渡し首木」と略称)であり、これは王禎『農書』等の中国の絵画資料にも見られることから、中国系長床犁伝来の痕跡と判断して「周防のウナグラ」(1)(2)(1990)にまとめた<sup>(1)</sup>。紀伊半島では朝鮮系の首かせ付き首木が伝来当初そのままの首引き法で20世紀まで使われてきたのに対して、山口県では中国系の引綱渡し首木がこれまた同じく伝来当初そのままの首引き法で20世紀まで使われてきたことが確認できたわけであり、日本の犁耕史研究にとっては誰も予期しなかった大発見であった。ただこの時は首木や鞍など牽引具の調査であり、在来犁のバラエティーの豊かさには驚きながらも、犁耕史への位置づけはまったくお手上げの状況であった。その結果、この論文で復原した歴史像は、今の時点で見れば不十分で誤りを含んだものになっている。

その後16年ばかり山口県にはご無沙汰が続くが、他地方の犁調査を続けるなかで、新たな展開があった。第1は日本の長床犁は大化改新政府が政策として導入し普及させたものであり、その政府モデル犁は一本犁へらをとまなうものであったということが判明<sup>(2)</sup>、第2はこの政府モデル犁と朝鮮系無床犁との混血型犁が広汎に存在し、それが日本の在来犁のバラエティーを作っていると考えられること、第3は上記の2項を踏まえた日本の犁の新たな分類法すなわち朝鮮系、政府モデル系(中国系)、混血型という3分法の発案である。そして第4は90年当時も古形と評価していた突起止めくの字形首木が、実は朝鮮系首木であったという新たな発見である。

以上の新たな展開の結果、周防の首木と在来犁から、「周防のウナグラ」段階の理解を乗り越えて新たな周防の古代史が再構成できそうなこと、そしてそこから朝鮮系渡来人による朝鮮系無床犁の持ち込みと、中国系政府モデル犁の地方普及という2つの波の重なり具合が具体的に検出



1989		2005		2006	
9.20	光市文化センター	3.21	岩国学校教育資料館 ①	3.15	和木町民俗資料館
9.21	美和町ニッ野 耕谷信男氏宅		岩国市民具収蔵庫		和木町教育委員会
	美和町歴史民俗資料館	3.22	周東町 祖生公民館		田布施町郷土館
	本郷町歴史民俗資料館		玖珂町社会教育課	3.16	橘総合センター
	鹿野町公民館		玖珂町民具収蔵庫		橘町民俗資料館
9.22	平生町教育委員会	3.23	本郷村教育委員会		周防大島教委大島教育支所
	大島町歴史民俗資料館		本郷村歴史民俗資料館		大島歴史民俗資料館
	久賀町歴史民俗資料館		美和町歴史民俗資料館	3.17	しらかべ学遊館
12.1	徳地町教育委員会	3.24	光市文化センター		柳井市民具収蔵庫
	山口市歴史民俗資料館		岩国学校教育資料館 ②		平生町歴史民俗資料館
	小郡町公民館	6.23	室積海岸		平生町民具収蔵庫
12.2	美祿市歴史民俗資料館		普賢寺		平生町教育委員会
	小野田市歴史民俗資料館		光ふるさと郷土館	3.18	周防大島文化交流センター
12.3	川上村阿武川歴史民俗資料館		平生町民具館		旧東和町民具収蔵庫
		6.24	周東町祖生民俗資料館	3.19	田布施町郷土館
			由宇町歴史民俗資料館		
			橘町民俗資料館		
			久賀町歴史民俗資料館		

図1 山口県の民具調査地域

できる見通しが生まれたことである。そこであらためて〔図1〕で見るように、2005年と06年、3度にわたる追加調査をおこなった。そこで本稿は過去5度にわたる山口県調査を総括し、「周防のウナグラ」(1)(2)で導いた結論を見直しつつ民具を通して周防の古代史を再構成することを目的とする。なお現在市町村合併が進んでいるが、本稿では場所の特定の必要から旧名を用いた。

また2005年と06年の3度にわたる追加調査は、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の一環として、非文字資料としての民具の可能性をさぐるためにおこなったものである。

**民具から古代にさかのぼるための方法的前提** 大化改新政府による長床犁導入政策などという話は一見荒唐無稽とも見られるであろうから、その前提となる大正・昭和期に使われていた20世紀の民具資料から、千数百年遡って6～7世紀を論じるというわたしの論証方法について、簡単に述べておきたい。

まず第1に、新製品に囲まれて暮らす現代人は、モノは日々進化するものと考えがちであるが、前近代の伝統的農村社会では「農具は変わらないのが当たり前」という原則があったことを確認しておかなければならない。たとえば紀伊半島の首かせ付き首木は6世紀の伝来以来、朝鮮半島の特徴を20世紀まで保ち続けていた<sup>(3)</sup>、山口県の山間部で使われた引綱渡し首木は、7世紀の伝来以来、中国系の特徴を20世紀まで保ち続けていた<sup>(4)</sup>。前近代では道具は壊れると同じ形で更新されるため、生物が遺伝子によって親の形質を継承していくのと同じように、個体は入れ替わっても形と呼称は千年を越えても継承されるのである。

第2に、さらに細かく見ていくと、道具のなかには時代とともに変わりやすい道具と変わりにくい道具があることが見えてきた。まず生産用具と消費生活用具を比べると、消費生活用具の方が変わりやすく生産用具は変わりにくい。また稲作農具で田畑を耕起する用具と稲刈り以降の脱穀・調製用具を比べると、耕起用具が変りにくいに対して脱穀・調製用具の方が変わりやすい。さらに耕起具でいえば、鍬のように人が使うものに対して、犁・馬鍬のように牛馬に引かせる農具の方が変わりにくいことが明かになってきた。つまり犁はもっとも変化の少ない農具であり、20世紀の民具から古代にさかのぼるには格好の資料なのである。

第3には、日本の農具のもつ各地各様でゆたかなバラエティーは、その地の農民が何世代にもわたって小さな改良を積み重ねた結果であり、その土地の地形や土質に高度に適応していると信じられてきた。ところがこと犁についていえば、福岡県では畑作向きとされる抱持立犁が畑でも水田でも平地でも山田でも使われている一方、奈良県では水田向きといわれる長床犁が、畑でも水田でも平地でも山田でも使われているという現実があり、農具は決してその地の地形・土質に適合しているわけではない。農具の形は地形・土質によるのではなく、むしろその地域に渡来人が来たか来なかったかといった歴史的事情によって決まることが明らかになってきた。そうであれば民具は歴史資料として使えることになる。

第4に、このことは犁の分類法にも影響を与えることになる。これまで日本の犁研究は、長床犁・短床犁・無床犁という犁床を基準にした形態分類があり、犁型と耕深性能や安定性を関連づけた研究がおこなわれてきたが、これは犁を耕起用具として機能面から分析しようという立場の分類であり、基本的分類として有効なものである。ところが日本では犁耕は外来の技術であり、伝来系譜によって形は決まってしまうという現実<sup>1)</sup>に立脚すれば、朝鮮系と中国系、それに両者の混血型という新たな分類が可能となる。そしてここからは各地の犁型をもとに各地各様の古代史を復原するという展望が開けてくる。

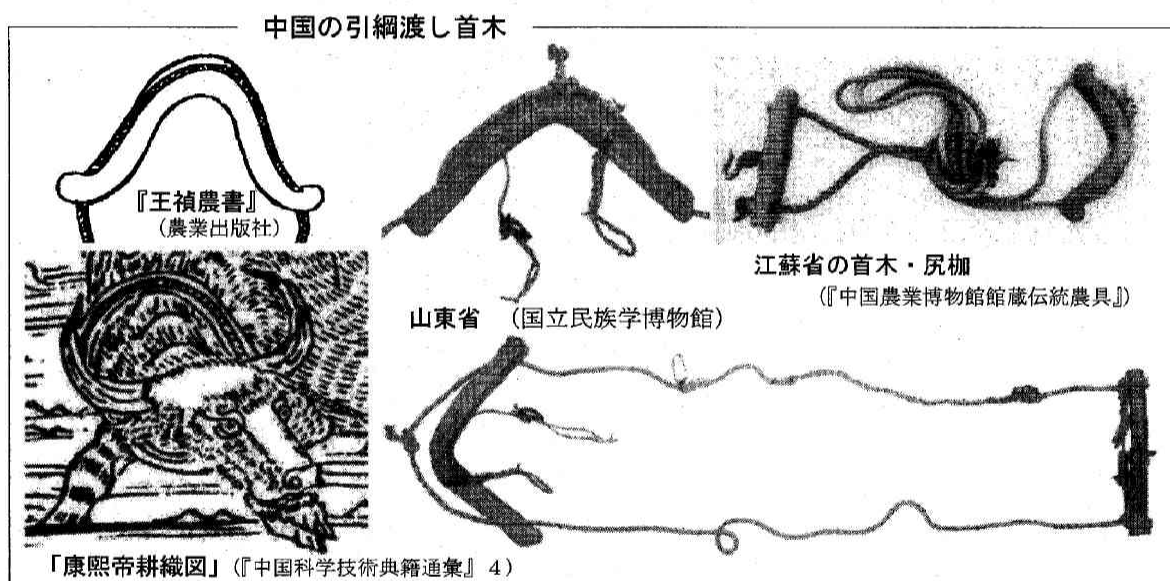
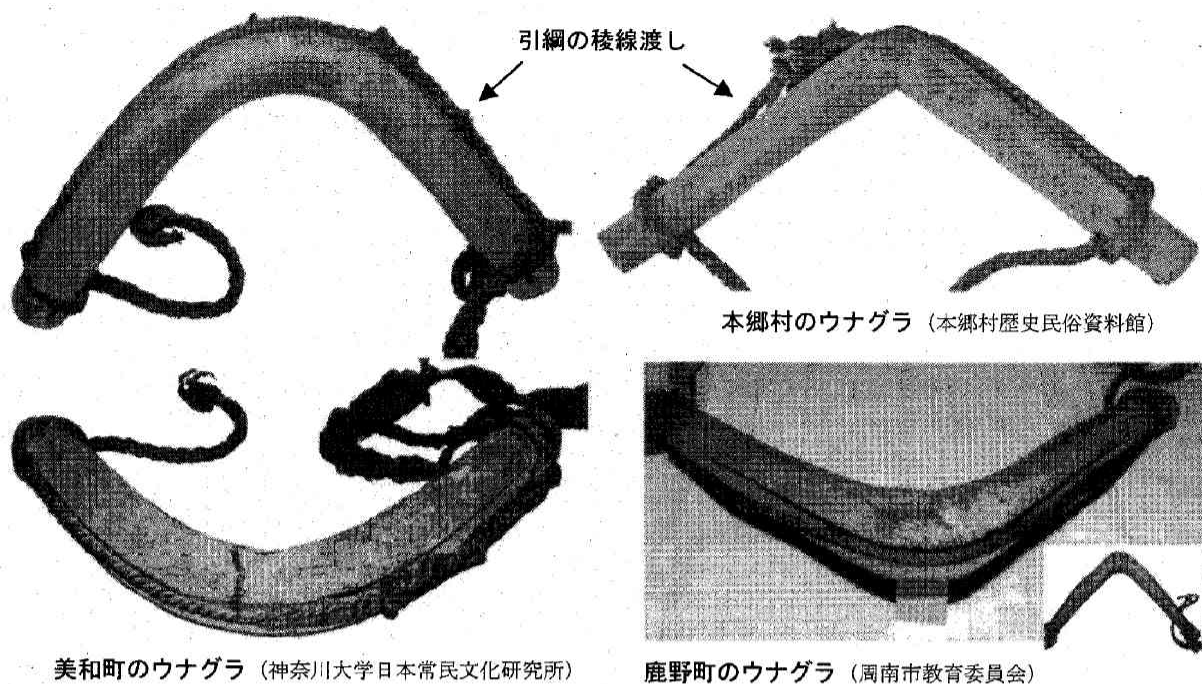
以上の4点を踏まえれば、20世紀の民具から遺伝情報を引き出し、それを分析・再構築することによって、それぞれの地域ごとの古代史の復原が可能となるが、それでも20世紀の資料から6～7世紀を論じるとなるとそれは推定であり、当時の文献なり出土資料を直接あつかっているわけではないので、所詮は状況証拠にすぎない。この状況証拠にすぎない推定を史実として確定するために私のとっている方法は、民具からの推定結果を別系統の考古資料や文献史料あるいは別の民具からの推定結果と重ね合わせて正しいかどうかを検証するという方法である。この現代に残されたかすかな痕跡から論理だてて仮説を立て、他系統の資料から検証して史実を固めていくという「仮説と検証」法は、地質学や古生物学など何百万年、何億年さかのぼって研究する分野では広く用いられている方法であり、こうした客観的・科学的手続きを経るならば、20世紀の民具から痕跡を抽出して古代を復原することもまた可能なのである。

それでは次節以下で調査資料にもとづいて具体的な分析にはいることにしたい。

## 1. 朝鮮系首木・中国系首木の棲み分け的分布

**引綱渡し首木の分布とその系譜** 1989年の調査では、周防の山間部の玖珂郡美和町・本郷村、都濃郡鹿野町に〔図2〕で見るような引綱の稜線渡しをとまなう首木を発見、長門の美祢市でも確認した。その後の2005年、06年の調査では89年に光市で確認した突起止め首木の検出に力を入れて調査地域を周防東部に絞ったため、引綱渡し首木の新たな検出はなかった。

くの字形に曲がった首木で農具を引かせるなら、首木の両端から5cmほどのところに挟りを入れて括れをつくり、そこに左右の引綱を括ればいいし、一般に首木では括れ方式がもっともポピュラーなものである。そもそも引綱を首木の稜線に沿って伝わせた状態で農具を引かせるなら、引綱は強く後方に引かれるためにたちまち稜線を外れるであろう。それを予想して引綱渡し首木では首木の稜線に引綱が半分隠れるほどの溝を彫っており、とくに直角近く曲がるタイプでは頂部の溝は深くして引綱がまったく埋まるぐらいにしている。本来なら首木両端の括れ加工で済むものを、わざわざ溝を彫ってまで稜線を伝わせるのな何故か。この問いに答える前に、このような非合理きわまりないものに出会った場合は、まず何らかの歴史的系譜を引いている筈<sup>2)</sup>として、系譜を探るのが民具から歴史にさかのぼる際の鉄則である。そこで89年には記憶を頼って元代の王禎『農書』の「牛軛」図に見られることを確認して中国系と判断したが、その後も清



### 引綱渡し首木の形成過程

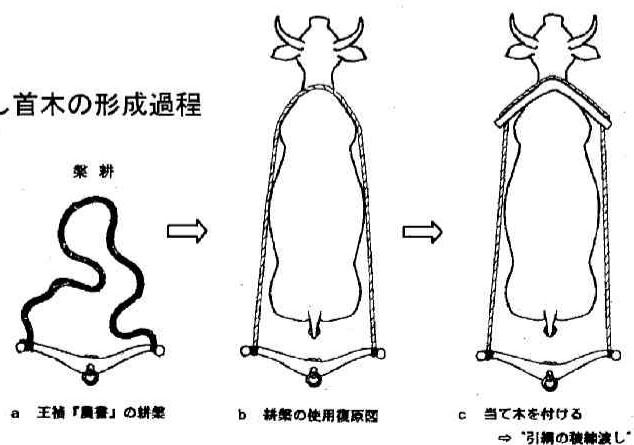


図2 引綱渡し首木は中国系



代の『康熙帝耕織図』にも明確に描かれており、国立民族学博物館には山東省と陝西省の引綱渡し首木が収集されていること、『中国農業博物館蔵中国伝統農具』<sup>(5)</sup> (2002) にも江蘇省のもの2点、山東省のもの2点の計4点の引綱渡し首木が収録されているなど、中国で広く使われていたことの確認が進んでいる。

さてなぜこのような面倒な加工を必要とする引綱渡し首木が生まれたかについては、河野「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」(1996)のなかで、二頭引き犁から一頭引き犁への転換の技術革新の過程において、牛の頸に直接引綱をかけて引かせたところ引綱の摩擦で皮膚が損傷し、摩擦防止の「当て木」として引綱の内側にくの字形の保護材を嚙ませたことに始まるとの見解を提示しておいた<sup>(6)</sup>。われわれから見れば首木であるが、開発当初の人々にとってはあくまで当て木であり、引綱で農具を引いているんだと意識している限り、稜線に沿って引綱を伝えなければならなかったのである。

さて引綱渡し首木の山口県域への伝来について、河野「周防のウナグラ」(1990)では、朝鮮半島における中国系渡来人の日本への再渡来によって持ち込まれたのではないかとし、奈良時代・平安時代に玖珂郡に秦・秦人姓が見えることと結びつけて解釈していたが、現時点で見ると、伝来について語れるだけの材料が揃わない段階で結論を急いだきらいがあり、そのため大部分を推測に頼っていて、学説として定立できる要件を備えていない。いわば車のメーカーが十分な安全確認を行わないまま完成車として市場に送り出したようなもので、研究者としては恥ずかしい限りである。そこでこの結論については全面的にリコールして、のちほど新たな見解を提示することにしたい。

**突起止め首木とその系譜** 1989年の調査では、光市で〔図3〕に見るような突起止め首木を発見、平生町・本郷村、それに周防大島の大島町・久賀町でも確認した。首木の両端近くに括れをつくらず、そのままの太さとし、末端から5cmほどのところに直径1cm前後の丸棒を貫いて1cm前後頭出しをして、その内側で引綱を括れば外れないという方式で、首木は一般には括れ方式なのに比べて特異な形態である。河野「周防のウナグラ」(1990)では、引綱渡し首木とともに古くにさかのぼる可能性のある在来型首木と位置づけておいたが、この段階では系譜については見当がつかず、分析対象からは除外していた。

その後、1997年の韓国調査の写真を整理中に温陽民俗博物館の展示室に突起止め首木が掛けられているのを発見、これを朝鮮系と認定することで周防の古代の見通しが開けてきた。そこで突起止め首木の分布範囲の確認と在来犁調査を目的に、2005年と2006年に追加調査をおこない、新たに岩国市・玖珂町・周東町・柳井市・田布施町と周防大島の旧橋町・旧東和町でも突起止め首木の存在を確認した。

さらに2006年の韓国調査で全羅南道農業博物館の展示室で突起止め首木を確認、朝鮮系、それも百済系である可能性が高まった。

このように周防東部の海岸部を中心に朝鮮系首木が使われていることは、かつてこの地域に朝

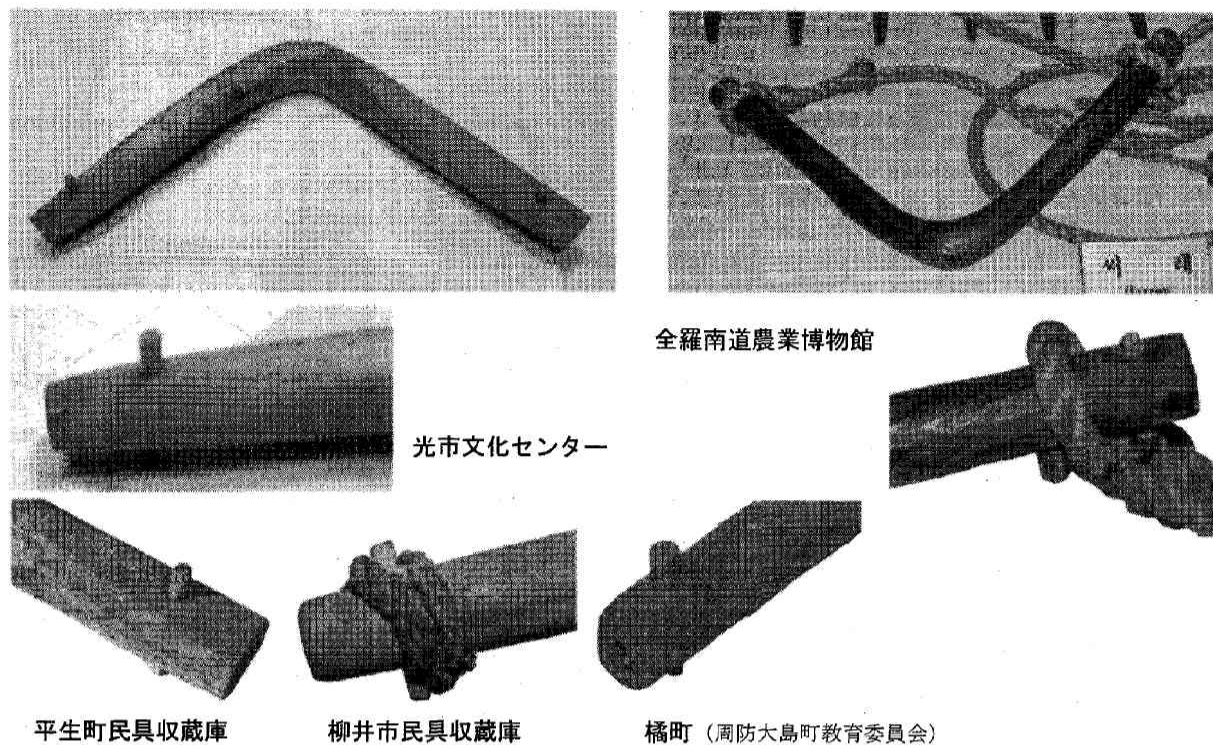


図3 突起止め首木は朝鮮系

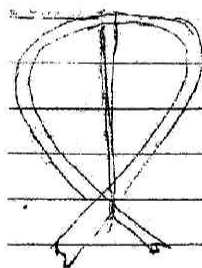
在来型の鼻ぐり



大島町 (周防大島町教育委員会)

朝鮮系鼻ぐり

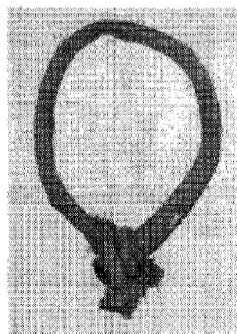
(4) ソウコトツツレ 牛の鼻輪  
(so kōttre) 材料 (nurumu-namu)



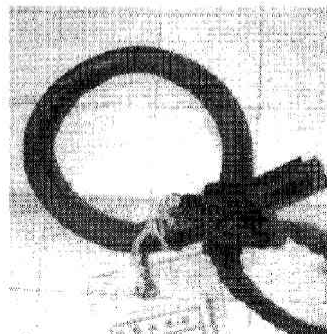
時期 年間何時にて  
げて縄にてくり置  
かくて使用する場合



高橋昇『朝鮮半島の農法と農民』



田布施町郷土館



大島町 (周防大島町教育委員会)

図4 周防の朝鮮系鼻ぐり

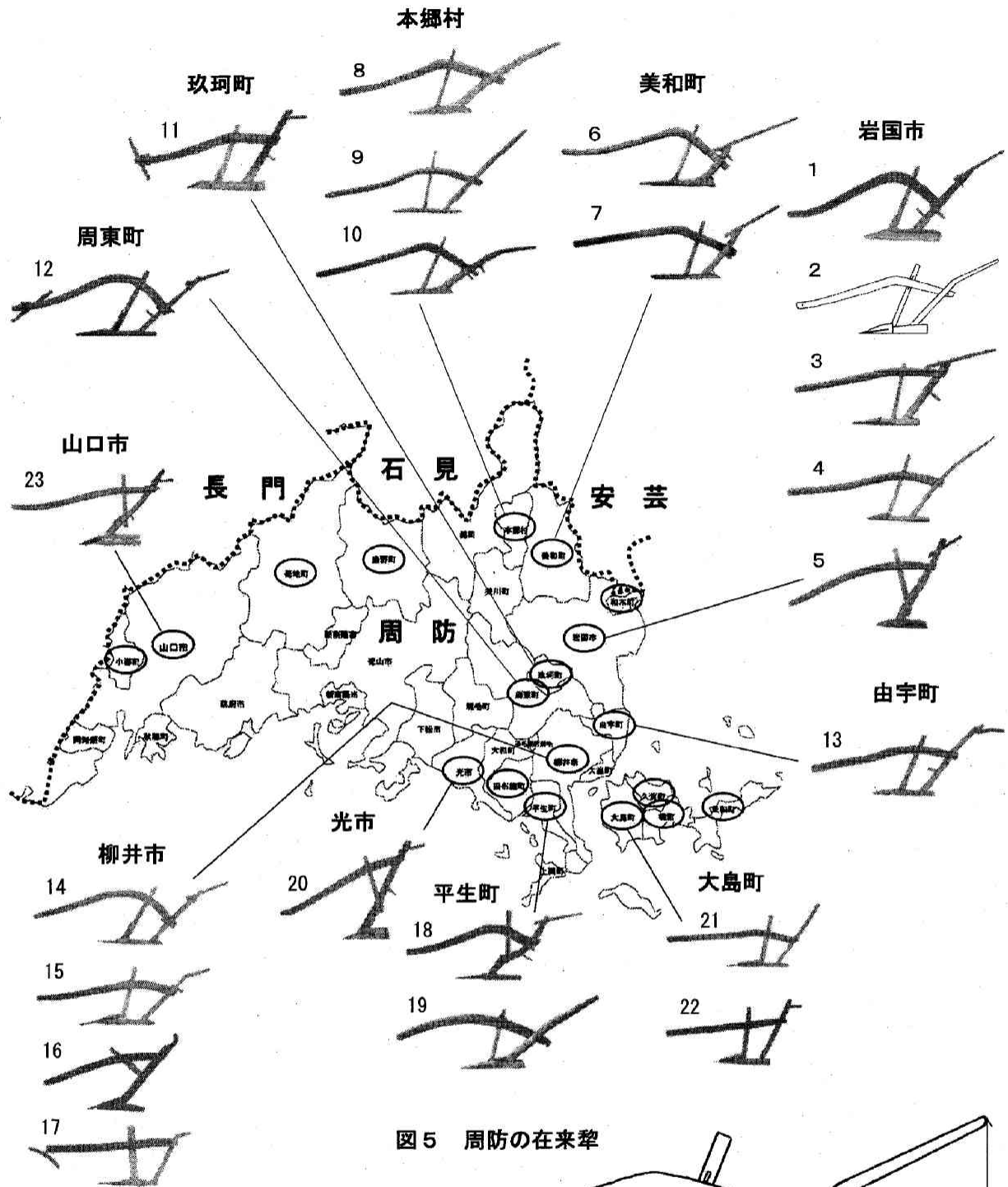
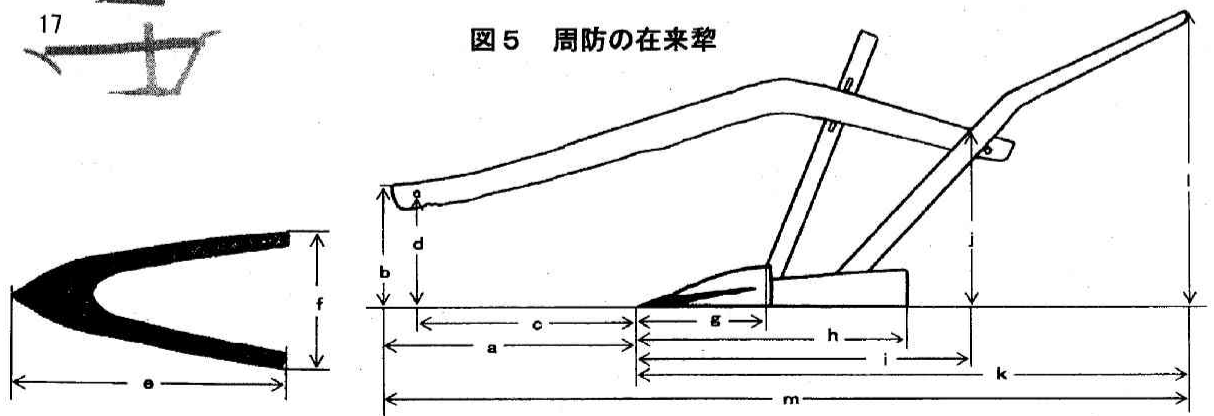


図5 周防の在来犁





## 周防の在来犁 計測データ

a b c d e f

No.	所蔵施設	犁型	犁轆先		牽引点		犁先				犁へら 形状
			x	y	x	y	鍛造	鑄造	刃長	刃幅	
1	岩国学校教育資料館	曲轆長床	78.3	22.3	72.0	20.0		△	欠		横板15.4×12.8
2	岩国市収蔵庫①	曲轆長床	64.0	32.0	56.7	30.0	○		31.0	12.7	隆頭・なし
3	岩国市収蔵庫②	曲轆長床	55.8	34.5	47.5	33.5		○	30.3	17.8	耳板10.5×65
4	岩国市収蔵庫③	曲轆長床	78.0	24.5	72.0	22.0	△		欠		なし
5	岩国市収蔵庫④	独脚有床	91.0	18.5				△	欠		
6	美和町 耕谷信男氏宅	曲轆長床	83.0	36.2	75.5	31.5		△	欠		円頭鑄造へら?
7	美和町歴史民俗資料館	曲轆長床	83.0	39.0				△	欠		
8	本郷村歴史民俗資料館①	曲轆長床	65.0	29.5	58.0	27.0	△		欠		耳板10.8×6.9
9	本郷村歴史民俗資料館②	曲轆長床	70.4	18.5	62.5	17.5		△	欠		円頭鑄造へら?
10	本郷村歴史民俗資料館③	曲轆長床	77.0	24.0				△	欠		円頭鑄造へら?
11	玖珂町民具収蔵庫	曲轆長床	57.0	33.5	46.3	30.0		○	26.0	17.5	横板18.2×11.8
12	周東祖生民俗資料館	曲轆長床	65.1	30.2	59.6			○	34.5	19.5	円頭鑄造へら
13	由宇町歴史民俗資料館	曲轆長床	64.0	30.3	56.6	28.5		△	欠		なし
14	柳井市民具収蔵庫①	曲轆長床	80.0	33.4	73.0	32.8		△	欠		円頭鑄造へら
15	柳井市民具収蔵庫②	曲轆長床	53.3	36.7	49.3		○		41.5	12.0	なし
16	柳井市民具収蔵庫③	独脚有床	48.0	31.3	38.5	29.5	○		33.0	13.6	なし
17	柳井市民具収蔵庫④	直轆長床	50.3	39.5			○		26.0	10.5	なし
18	平生町民具館	独脚有床	47.7	31.8	42.0	39.3		○	33.0	18.6	なし
19	平生町収蔵庫	曲轆長床	58.0	24.0			○		28.8	13.8	耳板11.5×5.8
20	光市歴史民俗資料館	独脚有床	69.0	28.0	59.8	28.0		△	欠		不明
21	大島町歴史民俗資料館①	曲轆長床	69.8	35.0	63.5	32.5	○			9.5	なし
22	大島町歴史民俗資料館②	直轆長床	56.3	37.7	48.3	35.2	○		30.5		なし
23	山口市歴史民俗資料館	独脚有床	87.0	50.0	74.5	48.0		○	23.5	19.0	円頭鑄造へら?

△ は木部の形状からの推定

g h i j k l m

No.	所蔵施設	犁柱 前面	床柄 一木	床長	轆柄交点		柄尻		全長	重量 kg	重心		備考
					x	y	x	y			x	y	
1	岩国学教	27.5			73.8	42.8	132.3	91.0	210.6	13.4	33.5		
2	岩国 ①	30.4		70.0	87.5	45.8	141.8	76.2	205.8	8.3	36.0		
3	岩国 ②			68.8			141.7	75.3	197.5				犁先は別物
4	岩国 ③	21.5		*61.6			125.0	87.0	203.0	6.0	27.5		
5	岩国 ④			*52.8			79.0	95.5	170.0				
6	美和耕谷	38.0	○	*84.0	82.5	40.0	170.0	75.0	253.0	6.8			
7	美和歴民			*72.5			141.5	77.5	224.5				
8	本郷 ①	24.5	○	*59.5	78.0	36.0	140.5	63.5	205.5	6.5	35.5		
9	本郷 ②	32.4		*72.5			145.0	90.5	215.4				
10	本郷 ③	33.0	○	*71.5	92.8		185.5	56.5	262.5				
11	玖珂町	35.8		84.5	90.4	58.8	127.5		184.5	13.3	40.5		
12	周東祖生	38.5		70.5	96.0	32.5	159.0	71.5	224.1	12.1	40.0		
13	由宇町	26.5		*67.4	81.8	49.5	135.8	74.0	199.8	9.0	36.0		
14	柳井 ①	30.5		*78.8	90.0	35.0	159.5	77.8	239.5	10.0	44.0		
15	柳井 ②	50.0		91.3	112.0	44.5	160.0	68.8	213.3	12.7	50.8	23.5	
16	柳井 ③	36.5		63.3	78.2	65.8	97.5	87.3	145.5	10.0	17.5		尻枷付き重量
17	柳井 ④	33.5		60.0			93.5	56.0	143.8				
18	平生民具	37.0		71.8			135.0	71.0	182.7	10.0	45.3		
19	平生収蔵	27.2	○	59.5	69.5	34.5	126.3	68.0	184.3	8.3	33.6		
20	光市	17.6		*49.8	59.0	91.0	104.5	88.0	173.5	7.5	13.8		
21	大島 ①	43.5		79.0	86.5	37.5	119.5	79.3	189.3	8.0	38.7	24.5	
22	大島 ②	32.8		66.4	78.0	55.8	104.0	71.8	160.3	8.8	32.7	26.5	
23	山口市			77.0	86.0	73.5	115.5	85.5	202.5				

\* は木部のみの犁床長

鮮系渡来人による牛と犁の持ち込みがあったことの痕跡とみることができよう。そしてウナグラという呼称をもつことからすれば、首筋のことをウナジではなくウナと呼んでいた時代の伝来であり、紀伊半島のウナグラで論証した結果を援用すれば、それは6世紀だったことになる。そして紀伊半島のウナグラも朝鮮系でありながら首かせ付き首木であり、周防の突起止め首木とは明らかに形態が異なる。これは朝鮮半島での首木の形態差が移住先の日本列島にまで持ち込まれた結果と考えられ、将来の韓国調査でそれぞれの形態のふるさとの特定が期待される。

**朝鮮系鼻ぐりの発見** [図4] でみるように牛の鼻ぐり(鼻木, 鼻輪)は、日本では牛の鼻を貫いた蔓の両端を細い台木に差し込んで止める方式が一般的である。それに対して朝鮮半島では牛の鼻を貫いた蔓の両端を単純に交差させて交点を紐で縛る方式が一般的なようで、戦前の高橋昇の調査では黄海道での写真と江原道での調査ノートが残されている。それによれば「ソウコツツレ(牛の鼻輪) 年間何時にても差支えなく、適当なる枝を切り取り灰火にあぶりて曲げて縄にてくくり置く。かくて使用する場合には水に浸してやわらかくして鼻に通す」とある<sup>(7)</sup>。日本の鼻ぐりは朝鮮半島方式をもとに1段階進化した形態であろう。なお高橋図に見える等間隔の横線は、フィールドノートの罫線である。

2006年の調査では、田布施町・旧大島町・旧東和町で朝鮮半島方式の牛の鼻ぐりが収集されていることを発見した。さきほど突起止め首木から朝鮮系渡来人による牛と犁の持ち込みを推定したが、この3町には突起止め首木も収集されており、首木からの推定を一層確実なものと補強する資料といえよう。

なお日本タイプと紹介した台木に通す方式も朝鮮半島の写真資料には見られるので、台木方式そのものが朝鮮系である可能性もあるわけだが、このあたりは後日の検討に譲ることとして、さしあたりは交差方式は伝来当初の朝鮮系という判断には間違いはないと考えられる。

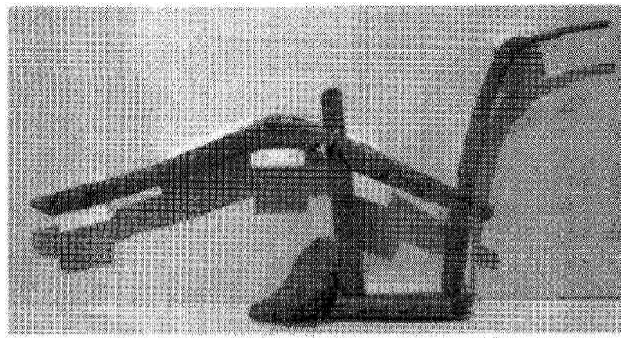
ここで分析をさらに一歩進めるために、在来犁を見ていくことにしたい。

## 2. 周防地方の政府モデル系長床犁

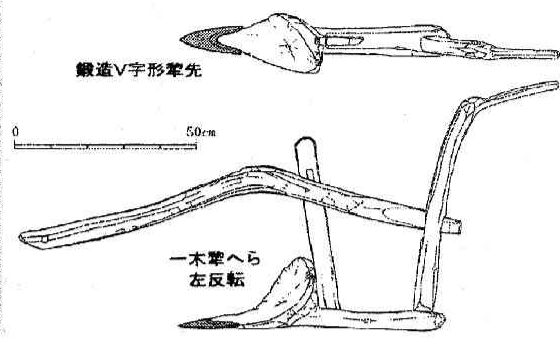
**周防地方の在来犁の分布** [図5] にはこれまで調査した周防地域の在来犁を網羅的に掲げた。ここには政府モデル犁の後裔にあたる長床犁が大部分を占め、政府モデル犁と朝鮮系無床犁との混血によって生まれた独脚有床犁および直轅長床犁が一部に含まれている。そこでまず多数を占める政府モデル犁の後裔について、2, 3 具体例をあげて分析していくことにしたい。

**政府モデル系長床犁** [図6] には政府モデル犁の後裔のさまざまなバラエティーを掲げた。まずaは7世紀に木部の完形品で出土した兵庫県梶原遺跡出土の梶原遺跡A犁である。犁へらは犁床と一木造りで左反転の曲面に削り出しており、政府モデル犁の忠実なコピーと考えられる。犁先は犁頭の縁部分が断面三角形に尖って加工されていることから、風呂鍬式の鍛造V字形犁先が装着されていたと推定される。

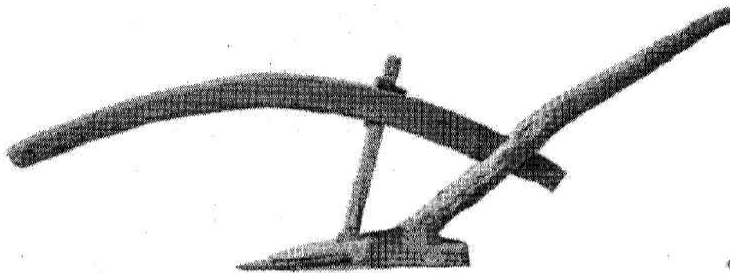
bは梶原遺跡出土犁をもとに復原した七道向けの政府モデル犁で、犁床と一木造りの左反転の



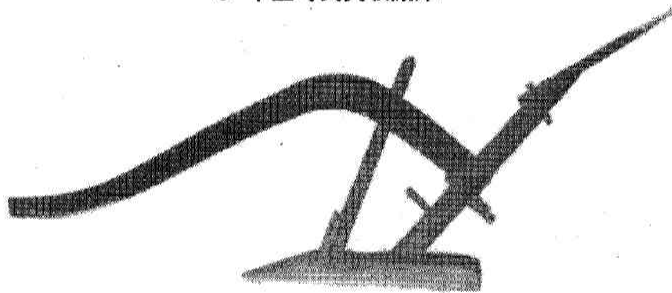
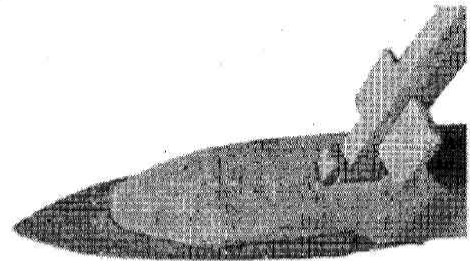
a 梶原遺跡出土犁 (丹波市教育委員会)



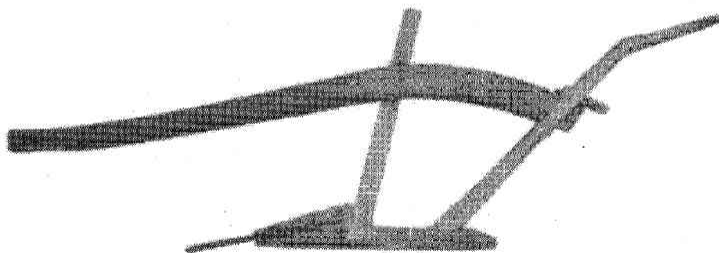
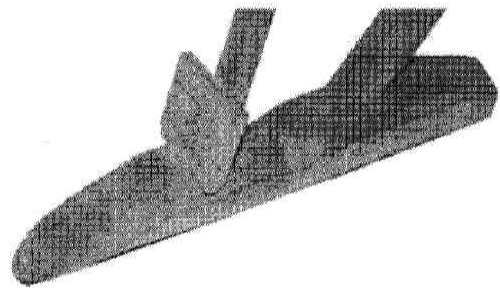
b 七道向け政府モデル犁の復原図



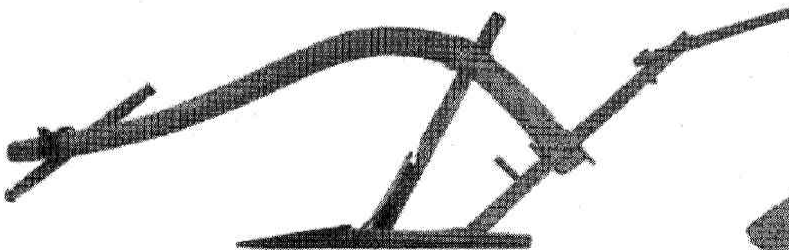
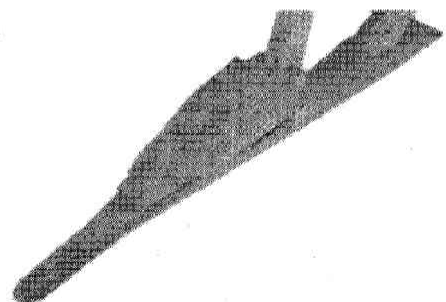
c 平生町民具収蔵庫



d 岩国市学校教育資料館



e 柳井市民具収蔵庫



f 周東町祖生民俗資料館

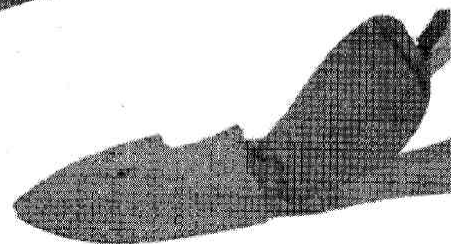


図6 政府モデル犁系長床犁

曲面へらをもつ曲轆長床犁で、鍛造V字形犁先を装着し、犁柄は握り部分が前後方向の棒となる逆L字形系把手をともなっていたと推定される。この犁柄と握りの曲がりとは左側面から見た掲載図ではLの裏文字の上下逆転図となるが、右側面から見れば正文字なので「逆L字形系把手」と呼ぶことにしている。

cは、平生町民具収蔵庫の曲轆長床犁で、政府モデル犁以来の鍛造V字形犁先を装着し、犁へらは見られず、犁柱の下部に幅11.5cm、高さ5.8cm、厚さ1.0cmの小さな横板を差し込んで耳板とし、犁へらの代わりとしている。一木犁へらの加工が難しかったための退行的対応であろう。この場合、耳板は正面を向いているので耕土を左右に分けて進む平面耕であり、左反転は継承されていない。この犁の特徴は犁床と犁柄が一木造りで木取りされていることである。この理由については長床犁の四角枠を構成する四隅のうち、犁床と犁柄の結合部分がもっとも大きな力を受けるので、ここが崩れると犁としてな成り立たない。ところが犁柄が後傾している場合、ここは斜め柄組みが必要となる。素人細工の場合、直角の柄組みは何とかこなせるが、斜め柄組みとなると使用中にかかる大きな力に耐える堅牢さで仕上げることはかなり困難である。そこで間違いなく安全な強度が得られる一木造りを選択したのであろう。幹の半分を犁床とし、そこから伸びる枝を犁柄としたもので、自然木を利用したため木の形状に規定されて、犁柄はやや曲がった棒のままとなっている。また木目に沿った木取りをするなら犁床上面は樹皮近くになるので、政府モデル犁のような高い犁へらを削り出すことができない。この犁が一木犁へらを採用しなかったのは、犁床と犁柄の一木造りを優先させたことも関係すると考えられる。

dは岩国市学校教育資料館の曲轆長床犁で、犁先を欠くが犁頭の形状からして鑄造犁先が装着されていたと考えられる。鍛造V字形犁先がおそらく中世以降に鑄造犁先に差し替えられたのであろう。犁柱下部に幅15.4cm、高さ12.8cm、厚さ2.5cmの小さな横板を打ち付けて犁へら代わりとしているが、これは一木犁へらの加工が難しかったための退行的対応であろう。また横板はc犁の耳板と同じく正面を向いているので平面耕であり、左反転は継承されていない。犁柄の上端には別材の握りを柄結合しているが、これは政府モデル犁の逆L字形系把手の変形とみられよう。

eは柳井市の民具収蔵庫の曲轆長床犁で、一木犁へらを継承して犁頭部分は肥大化した形に加工されている。犁先は長さ41.5cm、幅12cm、厚さは1.5～1.7cmという厚手の鍛造V字形犁先で、風呂鍬の内縁のような木部を噛むV字溝は失われて厚手のV字形鉄板となっており、犁頭木部にスリットを刻み込んでそこにV字板状の犁先をくわえ込む形になっている。この犁先が厚手で長い形状に作られていることについては、鍛造V字形犁先は鑄造犁先に比べて切れ味が悪く掘進抵抗が大きいので、切れ味で勝負ができないなら槍状に成形して、土の抵抗を軽減しつつ突き進むという方向に特化していったものと推定される。この犁の犁頭部分を上から見ると、肥大化した木部から細い鍛造V字形犁先が突き出ている、口吻の長いインドの鰐ガビアルの頭部を見るようである。



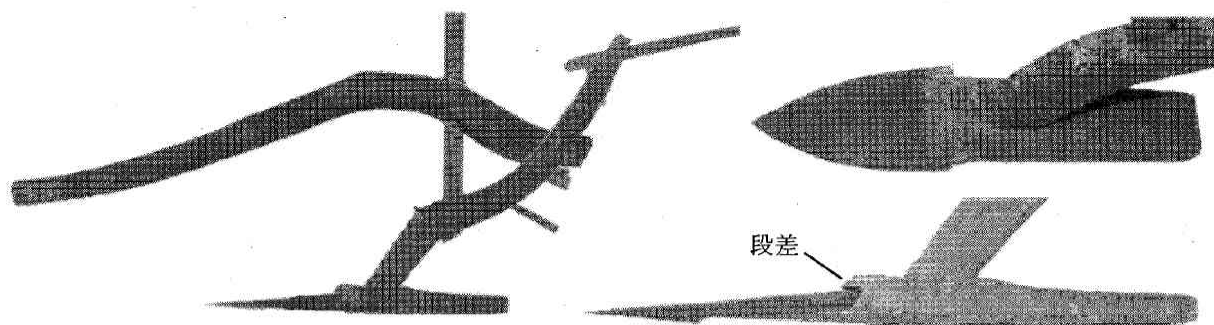
fは周東町祖生民俗資料館の曲轅長床犁で、骨格は政府モデル系の曲轅長床犁で、犁柄の上端には別材の握りを柄結合しているが、これはdの岩国の犁と同じく、政府モデル犁の逆L字形系把手の変形とみられよう。ただ犁先と犁へらは後世に鑄造品に差し替えられたようで、舟状隆起つきの鑄造犁先と円頭犁へらを装着している。この円頭犁へらは九州にも分布し、犁型や地域を越えて装着されていることから、各地の犁型が固定した7世紀以降に、地域を越える広がりで広められたことが想定される。そして円頭犁へらは鑄物であるから、広めた主体は鑄物師と考えられる。7世紀以降で、鑄物師集団が地域を越える広がりで鑄物製品を広めたとなれば、それは網野善彦の提起された諸国を往き来する「廻船鑄物師」の営業活動が想起される<sup>(8)</sup>。これは在来犁には地域の古代6～7世紀史の情報の他に、中世12～13世紀の鑄物師の営業活動の痕跡も残されていたことになり、この犁は中世鑄物師研究の重要資料となろう。犁柄の上端には別材の握りを柄結合しているが、これはdの岩国の犁と同じく、政府モデル犁の逆L字形系把手の変形とみられよう。

### 3. 周防地方の混血型犁

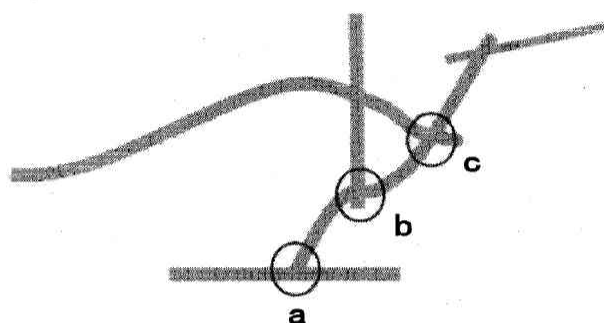
〔図7〕は周防地方の混血型犁のパラエティーである。aは平生町民具館の独脚有床犁で、上半分を見れば三角杵無床犁だが、下半分を見るとスキーを履いたような形で長い犁床がついており結果的には長床犁となっているという、朝鮮系無床犁と政府モデル系長床犁の混血型の一典型をなしている。私はこれを独脚有床犁と名付けているが、独脚有床犁は四国の徳島県・香川県にも見られ、その香川県の例について、織野英史氏は「乙字形長床犁」と名付けている<sup>(9)</sup>。織野氏はほかに「Z字形長床犁」「Z字形短床犁」などの細かな分類名をもちいているが、Z字形は乙字形の近代化型とも見られることから、私は分類の細分化は避けておおまかに独脚有床犁で括っている。この独脚有床犁はS字形に屈曲した独特の犁身を備えているが、その理由は何か。なおここで「S字形に屈曲した」と述べたが、犁を左側面から見た写真や図では犁身の屈曲はSの裏文字となる。ただ右側面からみればS字形なわけで、その意味で2つの屈曲点をもちたがいに逆方向に曲がる形態は一般にはS字屈曲でいいのだろう。たとえば人に道を教えるさいにS字形のカーブがあるといった場合、話す方も聞く方も、2つの逆カーブがあると了解しているわけであって、空から見た場合にS字形か裏文字かは問題にならないからである。

bはその説明のため、平生町の独脚有床犁の骨格を示した図であるが、S字屈曲にすれば、直棒犁身の場合と比べて、犁床と犁身、犁身と犁柱も柄組み部分がより直角に近くなっている。古代では江戸時代以降のような農具加工の専門職は成立しておらず、自家製作が原則であった。もちろん村内の器用な人に頼むという場合も含んでの話であるが、素人の自家製作の場合、難しいのが柄結合である。犁は杵構造の犁体に牛の牽引による大きな力が加わるので、部材を結合する柄組みは堅固でなければならず、正確な柄穴の穿孔と柄の削り出しが要求される。結合部がぐらついたのでは使い物にならないからである。素人でも慣れれば直角の柄穴なら何とかこなすこと

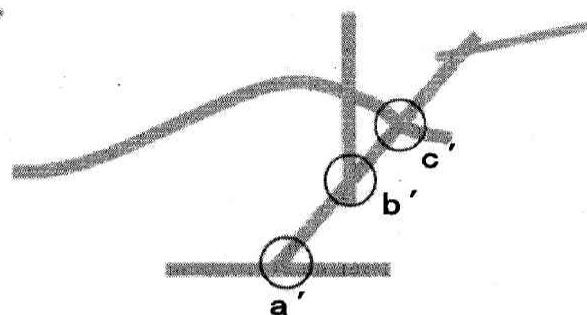




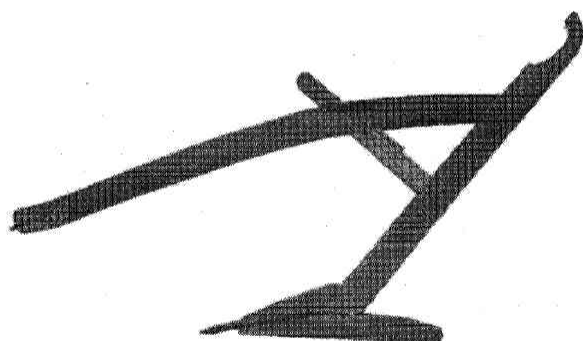
a 平生町民具館



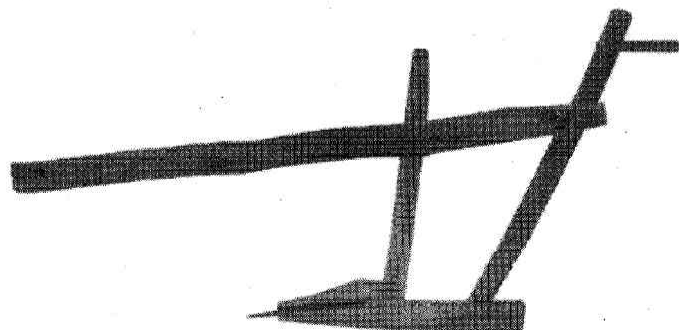
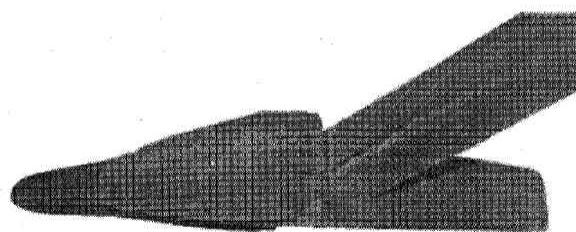
b 独脚有床犁の骨格



犁身を直棒にした場合



c 柳井市民具収蔵庫



d 大島町 (周防大島町教育委員会)

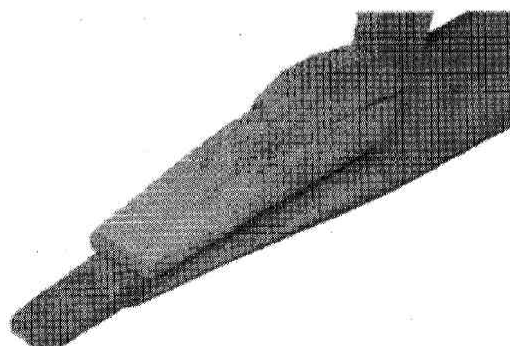


図7 周防の混血型犁

ができよう。しかしながら斜め柄組みとなると、その角度が小さくなればなるほど、正確な柄穴の穿孔は難しくなる。S字屈曲犁身はその点を考慮して、できる限り直角に近い形で部材が出会えるよう、犁身の形状の方を変えた工夫といえよう。図では平生犁の犁轅が曲がってくれているため、直棒犁身でも直角に近い角度になっているが、犁轅が直棒の下降犁轅なら、S字屈曲犁身が断然有利になることは間違いない。S字屈曲犁身は、自家製作時代の苦勞の結晶が定型化して継承されてきたものと考えられる。

平生町犁には舟状隆起をともなう鑄造犁先が装着されているが、犁先の根元、犁柱に近い部分で段差が生じている。この不自然な段差は何か。政府モデル犁との混血型である平生町犁には、もとは政府モデル犁から継承した鍛造V字形犁先が装着されていたと推定されるが、鍛造V字形犁先を装着した場合、犁先は縁の部分に装着されるので、足の甲にあたる部分はちょうど足の甲のように木部の盛り上がりができることになる。〔図6-c〕の平生町の曲轅長床犁がその例である。ところが鑄造犁先は平面の天板をもつので、鑄造犁先を装着する場合には足の甲部分の盛り上がりは削平しなければならない。そして鑄造犁先を装着すれば、削平した部分としなった部分の間に段差が残ることになる。平生町の独脚有床犁はまさにその形で、当初鍛造V字形犁先であったものが、後の時代に鑄造犁先に差し替えたという事件のあったことが、犁頭の段差という形で痕跡を残しているのである。また上から見れば段差の上段の左端には犁へら受けの穴があり、犁身の下から第一屈曲の上面には釘が2本残されていて、犁へらを裏面で固定しようとした痕跡と考えられる。つまりこの平生町犁にも、周東町犁と同じ形態の下部の両端が尖った円頭犁へらが装着されていたと考えられる。すなわちここにも中世の鑄物師の活動の痕跡が刻まれているわけであって、周防における中世鑄物師の研究の基礎史料となろう。

cは柳井市の民具収蔵庫の独脚有床犁で、犁頭木部は高く盛り上がった隆起犁頭で、最高点は地上高14.3cm、犁床上面との段差は7.4cmである。犁先は長さ33cm、幅13.6cm、厚さは1.1~1.4cmという鍛造V字形犁先であるが、風呂鍬の内縁のような木部を噛むV字溝は失われて厚手のV字形鉄板となっており、犁頭木部にスリットを刻み込んでそこにV字板状の犁先をくわえ込む形になっている。

犁身は平生町犁のような犁体のS字屈曲は失われていて直棒犁身になっている。江戸時代後期以降、在郷町の職人が犁体の製作を請け負うようになると、訓練された職人技をもってすれば斜め柄組みは難なくクリアでき、あえてS字屈曲犁身を採用しなくてもいいことになる。そして仕事場が町場となるとS字屈曲の材を見つけるのも困難になってくる。そして犁身が直棒化する条件は整ってくる。ただこれは条件は整っているだけであって、実際にそうなるとは限らない。農具の形は変わらないのが当たり前という前近代の伝統的農村社会では、非合理ではあっても伝統的な形状は継承され続けるであろうし、在郷町の職人も仕事の暇に山に出かけていい材の確保の努力は続けるであろう。これがいつ現実直棒化するかは地域ごとに異なることも考えられる。周防地域でのS字屈曲犁身の直棒化が何時なのかは、それ自身が今後の研究課題であ

る。

〔図5〕No 20の光市の独脚有床犁は直棒犁身であるが、これも上記の分析のように、かつてはS字屈曲犁身であったものが、おそらく明治・大正期に近代短床犁が一般化する中で直棒犁身化したものと考えられる。

dは、旧大島町の大島町歴史民俗資料館の直轅長床犁である。四角枠長床犁という骨格や一木犁へらを継承した隆起犁頭、逆L字形系把手を継承したトの字形把手など、大枠では政府モデル犁をよく継承しているが、ただ1点ことなるのは曲轅を継承せず下降直轅となっていることで、直棒犁轅が前方に向かって下降する下降直轅は、朝鮮系無床犁から継承したものと考えられる。その点では7割政府モデル系、3割が朝鮮系という政府モデル系の勝った混血型犁である。

犁頭の隆起は最高地点で11.6 cm、犁頭との落差は4.5 cmとなっている。犁先は厚さ cm のV字形鍛造板へらと考えられ、木部犁頭に削り込まれたスリットに差し込む形で装着されているが、肥大化した犁頭の幅に呑み込まれて、先端部分しか見えない。

#### 4. 周防地方における犁耕伝来の2つの波と中世鋳物師活動の痕跡

以上の在来犁の様相と先に見た首木の状況と総合して、周防における犁耕の伝来と展開の歴史を復原してみよう。

**犁耕伝来の2つの波の検出** まず周防東部の海岸地帯、光市・平生町・柳井市といった辺りに朝鮮系渡来人が入植し、牛と鼻ぐり・首木と犁を持ち込んだ。突起止め首木という様式からすれば、全羅南道が故郷の百済系であった可能性が高く、ウナグラという呼称からすれば6世紀のことだったと推定される。彼らの持ち込んだ犁は後に政府モデル犁との混血を起こして平生町や光市で独脚有床犁という形態をとっていることからすれば、抱持立犁のような犁体が短く犁身の立った短体無床犁であった可能性が高い。ところで周防に入植した彼らが故国のように鋳造犁先を使えたかどうかは未知数で、やむをえず鍛造V字形犁先で対応した可能性も考えられる。当初から鋳造犁先を使った痕跡は明確には検出できないからである。

これより後、周防・長門全域に政府モデル犁の下付という大事件がおこる。朝鮮系渡来人の持ち込んだ無床犁が混血型としてしか痕跡を残していないことからすれば、政府モデル犁の波は明らかに渡来人の入植の上に被っている。そして渡来人の入植が6世紀なら、政府モデル犁の波はおおまかには7世紀であろう。この政府モデル犁の下付にはかなり政治的圧力が働いていたようで、渡来人集落の短体無床犁は政府モデル犁との混血を起こして多くはS字犁体をもつ独脚有床犁となり、一部では直轅長床犁となった。

以上は民具から検出した情報による復原であるが、周防東部の海岸地帯への朝鮮系渡来人の入植については室積の地名が注目される。光市の室積湾は峨嵋山をのせた釣り針状に曲がった半島に囲まれた天然の良港であり、ムロツミなにわのむろつみ（館）は旅舎、各館を意味する古代語で難波館は大和政権の迎賓館であった。周防の室積も朝鮮半島や中国からの使節を大和への中継地点で迎える迎賓

館であった可能性があり、周防国造の管轄下で朝鮮語を話す渡来人が配置されていても不自然ではない。延喜8年(908)の周防国玖珂郡玖珂郷戸籍にも国造家の周防凡直姓に混じって秦姓・秦人姓が見られる<sup>(10)</sup>。また『隋書』倭国伝に見える大業4年(608)の隋使裴世清の大和への訪問ルートに「また竹斯(筑紫)国に至り、また東して秦王国に至る<sup>(11)</sup>」とある秦王国に関係することも考えられる。これら地名や文献史料からの推測と民具からの推測結果がおおむね合致することは注目される。

**政府モデル犁継承の周防でのケース** 政府モデル犁は、7世紀の梶原遺跡出土犁をもとに作成した復原図(図6・b)のように曲轅長床犁で、鍛造V字形犁先を装着し、犁床と一木造りで左反転の曲面へらを削り出すという特異な形態で、握り部分が前後方向の棒となる逆L字形系把手をともなっていた。この政府モデル犁は一木造りの曲面へらという高度な加工をともなうので、そのままの継承は難しかったと見られ、周防地域ではさまざまな対応が見られる。犁頭部分を肥大化させて大きな盛り上がりは作るが高さは不十分、そこで犁柱の前面に小さな横板を打ち付けてへら代りにするとか、あるいは横板を犁柱に差し込んで耳板とすることで対応した例もある。また犁頭の盛り上がりを作ることが困難で犁柱の前面の横板や犁柱に差し込んだ耳板で我慢するケースもあり得たであろう。この場合、横板や耳板は例外なく正面を向いており、左反転の畝立て耕という要素は捨てられて、単純な平面耕になっている。始めて犁を使う人々にとっては、人力の鋤耕に比べて連続耕起が可能な犁はそれだけで満足であり、犁体加工の難しい高度な左反転までは望まなかったのであろう。

この多様な対応から、1つの可能性が指摘できよう。7世紀出土の梶原遺跡出土犁や下川津遺跡出土犁は、完璧な一木犁へらを備えていて、政府モデル犁の忠実なコピーと考えられる。これはおそらく政府モデル犁が評督のもとに届けられた後、評督のもとで再コピーされて管下の経営体に配布されたものであろう。管下の経営体主は、まずはこのコピー犁を壊れるまで使うことになる。ところがこのコピー犁が壊れたらどうなるか。その更新はおそらくその経営体主の責任であり、評督はここまで面倒を見てくれないであろう。そうなればおのれの力量、木工加工の技術水準に合わせて更新するほかはない。政府モデル犁の一木犁へらは、直径の大きな材を必要とする以外に曲面構成の一木犁へらを彫刻のように削り出すという困難をともなっていた。そこで凸面構成の肥大化犁頭は作ったものの犁へら部分は横板を犁柱に打ち付けるとか、犁柱に横板を差し込んで耳板とすることで間に合わせるなど、退行的対応が現れたものと推測される。

あるいはもう1つの可能性も考えられる。評督が再コピー犁を配布せず、政府モデル犁を館にいわば展示して、管下の経営体に参向してコピーせよと命じた場合である。梶原遺跡出土犁や下川津遺跡出土犁は、政府モデル犁の忠実なコピーなので評督のもとで再コピーがあったと推定するに相応しいし、民具なら東京都の足立・葛飾型長床犁の犁轅は直轅ながら犁床はかつては忠実なコピー犁であり、ただ一木犁へらの上部がひび割れで欠け落ちた際に板で補った、その補修犁の形状が後世まで継承された例であり、忠実なコピー犁段階を1段階経ていると推測できる。そ

れに対して周防の場合は退行的継承のみが目立っていて、いま把握している在来犁からは忠実なコピー犁段階が見えてこないのである。ともあれこうした点は、他地方の在来犁の地域的分析が進めば、いくつかの可能性に絞り込むことが可能となろう。したがって将来的課題であるが、問題の所在を示すため、あえて先行的分析を試みた。

**非混血の朝鮮系犁未発見という課題** 今回調査で回った周防・長門地域では、非混血の純粹朝鮮系犁にはまだ出会っていない。非混血の純粹朝鮮系犁は別稿で指摘したように<sup>(12)</sup>、政府モデル犁の下付の波が過ぎたあとに入植した場合、一過性の政策の影響は受けないので非混血の純粹朝鮮系犁として継承されることになる。これは古代の朝鮮系渡来人の最後に波となるので、7世紀後半の百済・高句麗難民の入植に相当する。したがって非混血の純粹朝鮮系犁が検出されれば、その地域に百済・高句麗難民が入植していたことになり、民具から地域古代史を復原する際の有力な手がかりとなる。そこで周防地域はといえば、今回調査で回った範囲では、まだ非混血の純粹朝鮮系犁には出会っていないということである。これが滋賀県湖東地方や関東平野なら、もう出会ってもおかしくない程度の密度で調査はしているのだが、まだ出会わないということは、百済・高句麗難民は周防へはほとんど来ていないということであろう。もっとも周防・長門地域をくまなく回っているわけではないので、今後の調査で出会う可能性も残されているが、現時点での暫定的結論として、百済・高句麗難民は周防へはほとんど来ていないという傾向性は指摘できると思う。

**中世の「廻船鑄物師」の活動の痕跡** 以上のべたような、6世紀に周防東部の海岸地方あたりに百済から人々が入植、その後7世紀には政府モデル犁と引綱渡し首木・尻枷のセットが周防・長門全域に普及が図られるという事件のあとかなり時間を経て、おそらく中世に入って鑄物師集団が鑄造犁先と鑄造円頭犁へのセットを売り込んで回るといった活動のあったことが、鍛造V字形犁先から鑄造犁先と鑄造円頭犁への差し替えの痕跡がいくつか見られることから復原できる。その際ある地域では犁頭を削平して鑄造犁先・犁へらを採用したが、ある地域では鍛造V字形犁先を使い続け、厚手の槍先形に進化する地方もあった。この中世の鑄造犁先と円頭犁へのセットは採用・不採用の選択の余地が見られたことからして、7世紀の政府モデル犁のような行政ルートでの普及政策ではなく、民間業者の商業活動による普及と見られ、網野善彦氏の提起された諸国を往き来する「廻船鑄物師」の活動に相当するものと考えられる<sup>(13)</sup>。氏によれば、河内国丹南郡の鑄物師は12世紀に蔵人所から供御人の地位を認められ諸国自由通行の特権を得て、和泉の堺津を拠点にその活動範囲は瀬戸内海から13世紀には九州・山陰・北陸に及んだという。この鑄造犁先と円頭犁への組み合わせは周防・長門の範囲を越えて九州を含む瀬戸内西部地域に広がりをもつようであり、今後の調査の進展で彼らのテリトリーの復原が可能になるものと期待される。

**「周防のウナグラ」のリコール点** 以上、これまで述べてきた結論は、河野「周防のウナグラ」(1990)の6世紀に朝鮮半島における中国系渡来人の日本への再渡来によって牛耕が持ち込まれ



たとする結論とは大きく異なっている。今回の結論は①中国系引綱渡し首木、②朝鮮系突起止め首木、③政府モデル系長床犁、④混血型独脚有床犁の4つの資料を確認したうえで、それらの存在が無理なく説明できる道を選んで得た結論であり、資料の裏付けをもつ一応妥当性のある説明といえよう。それに対して「周防のウナグラ」の結論はまだ①の引綱渡し首木のみしか発見できていない段階で、あとは推測で展開しており、しかもくの字形首木は中国系と誤った認識にもとづいて論をすすめている。したがって現時点でみるなら不十分極まりないものである。

「周防のウナグラ」はいわば足でかせいだ調査報告であり、山口県下で引綱渡し首木という中国系首木が伝来当初から形を変えずに20世紀まで継承されてきたという事実の発見に学史的意義があり、私自身もこの事実の上に大化改新政府による長床犁導入政策という学説を立てた。ただ先ほど紹介した結論部分については証拠不十分な立論でその結論も誤っており、メーカー側としてリコール宣言をして自主回収処分とし、代わって今回の結論を提示することにしたい。

## 5. 経済史再構築のための「民具からの古代史」の可能性

「文献からの古代史」と「民具からの古代史」以上、周防地方の民具調査データをベースに周防の6～7世紀史を復原してきたが、

この結論は文献史料に頼ったこれまでの歴史研究ではまったく見えなかった新たな世界である。文献史料は古くさかのぼればさかのぼるほど、史料そのものが希薄になり、しかも内容的には中央の都近辺の、天皇や貴族の、政治・外交関係の、しかも事件性のある事柄しか記録されておらず、その裏返しの地方の、庶民の、日常的は、経済活動は視界から外れてまったく見えてこないとい

う結果になっている。したがって時代をさかのぼるほど文献史学での経済史研究はほとんどお手上げとなっているのである。

ところがいま展開してきた民具調査にもとづく痕跡からの遡及的復原という方法を用いるなら、文献史料では見えなかった地方の、庶民の、日常的は、経済活動が具体的に見えてくるのである。これは文献史学が月の表面を見てきたとするなら、これまで見えなかった月の裏面を見るようなもので、今後、この民具からの古代史が経済史の新たな局面を開くものとして期待される。

**広域の比較調査の必要性** とくに今回は周防のおもに東部地域を対象に比較研究をした結果、有

文献からの古代史と民具からの古代史

	文献からの古代史	民具からの古代史
資料の数	きわめて少ない	全国に無数
カバーできる地域	都とその周辺	全国どこでもカバー
記録される階層	天皇・貴族	一般庶民
記録される内容	政治・外交	生産・生活＝経済
記事の性格	事件性のあるもの	日常的なもの
年代	年代の特定が可能	時代幅の限定なら可能
殖産興業政策 技術導入政策	記録されにくい	痕跡は確実に残る
所有関係	見えやすい	見えにくい
生産技術	見えにくい	具体的に見える

効な歴史情報が引き出せた。これは個々の資料、たとえば周東町の犁、柳井市の犁、平生町の犁をそれぞれ個別に見ていただけでは見えてこなかった歴史情報が、広域の比較調査によって引き出した例である。これは考古学にたとえていうなら、「周防東部遺跡」を広域発掘したのであり、周東町、柳井市、平生町の犁はそれぞれ一個一個の竪穴住居址に相当する。竪穴住居址一個では重要さは分かっても全体の歴史像は見えてこない。ところが登呂遺跡、吉野ヶ里遺跡など遺跡として捉えるなら、そこから日本史の一部を構成する弥生時代像が浮かび上がってくる。今回はこれと同じように、周防東部遺跡を一まとまりとして見た結果、6世紀の朝鮮系渡来人による無床犁持ち込みの上に、7世紀の政府モデル犁の押しつけ的普及の波が被っている様子が、明確な層位として検出できた。このような明確な層位はどこでも見られるとは限らない。これは周防東部地域の民具群のもつ特徴であり、日本史の全体像の再構成に貢献する資料群である。さらにその上位に中世の諸国を往反する「廻船鋳物師」の層が被っているのも検出できた。これは九州を含む瀬戸内西部地域の広域比較によって今後その実態が明らかになってくるであろう。

**地域の責任と研究者の責任** 以上見てきたように、周防東部の民具群から日本への犁耕伝来の2つの層位とさらに中世の鋳物師の広域活動の層位が検出できたとなれば、それぞれの市町村当局や住民にとって、民具は自分たちの独自の歴史を語る資料であり、地域の誇りの核であり、地域起こしの核となるであろう。その意味では民具は地域社会にとってはかけがえのない歴史資料であり、周防東部の民具群を一まとまりの遺跡として守ろうという姿勢で守っていく必要がある。他方、こうした民具群から広域比較を通して歴史情報を引き出すのは全国区の研究者の仕事であり責任である。研究成果を中央での学会発表に留めることなく、その成果は地域に向けて発信し地域に返す活動を展開しなければならない。民具を守る地域社会と広域比較から歴史を再構成する研究者とが協力して初めて、民具は地域の誇りの核として、地域起こしの核として守られていくのであろう。

**民具からの日本経済史の再構築** さきに見たように、文献史料に頼っている古代の地域の経済史は見えてこない。ところが民具を素材とするなら、地域ごとの庶民の日常活動、経済活動の復原が可能であり、地域社会に被さってくる東アジアの激動の波や中央政府を強引な政策の波に翻弄されつつもそこで生き抜く民衆の姿を抽出することができる。日本経済史の古代の部分はずから始めなければならない。経済学部で席を置く研究者としては、それが自分に与えられた職責と自覚している。

## おわりに

過去5度にわたる山口県調査は、いつもながらの駆け足調査であった。民具調査は行ってみなければ何があるか分からない。期待はずれも多いが予期せぬ大発見があって、毎回収支をはかれば大きなプラスの成果を得てきた。とにかく行ってみなければどんなものがどれだけあるのか、したがって調査にどれだけ時間を要するのか皆目見当のつかない中での調査である。したがって

計画の立てようもなく、多くの場合アポなし調査で、直接面談して意義を分かってもらって、非公開の収蔵庫に案内してもらおうというケースがほとんどである。にもかかわらず資料館、教育委員会の皆さんにはいつも好意的に実によく協力していただいた。そのデータの集積が本稿の分析を可能にしたのである。この場を借りて感謝の意を表したい。

1981年に民具調査で収蔵庫回りを始めたころは、計測はするものの全体像は見えてこず、今は種蒔きの時期、いずれは収穫期を迎えるであろうと気長に調査を続けてきた。その効果あって近年ようやく焦点が結びはじめて地域の古代史が再構成できるようになってきた。これもひとえに調査先の資料館・教育委員会・市町村当局者の理解と協力があったることである。この皆様方に感謝の意を表しつつ、本稿の結びとしたい。

#### 註

- (1) 河野通明「周防のウナグラ」(1)(2)、『民具マンスリー』23-2, 23-3, 1990年, 河野『日本農耕具史の基礎的研究』和泉書院, 1994年, 所収), 185頁。
- (2) 河野通明「7世紀出土一木犁へら長床犁についての総合的考察」、『商経論叢』第40巻第2号, 2004年), 126頁。
- (3) 河野通明「オナグラ・ウナグラ考—首かせ付き首木のたどった道—」、『列島の文化史』第5号, 1988年, 河野『日本農耕具史の基礎的研究』和泉書院, 1994年所収), 129頁。
- (4) 註(1) 河野「周防のウナグラ」(河野『日本農耕具史の基礎的研究』), 188頁。
- (5) 雷于新・肖克之主編『中国農業博物館蔵中国伝統農具』(中国農業出版社, 2002年), 68, 71頁。
- (6) 河野通明「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」、『商経論叢』第32巻1号, 1996年) 145頁。
- (7) 高橋昇『朝鮮半島の農法と農民』(未来社, 1998年), 口絵, 683頁。
- (8) 網野善彦「中世の鉄器生産と流通」、『講座・日本技術の社会史』第5巻 採鉱と冶金, 日本評論社, 1983年), 42頁。
- (9) 織野英史「乙字形長床犁の外形—犁地方調査雑感—」、『香川史学』第26号, 1969年), 49頁。
- (10) 竹内理三編『平安遺文』古文書編第1巻(東京堂, 1964年), 289頁。
- (11) 石原道博編訳『新訂魏志倭人伝他三編—中国正史日本伝(1)』(岩波新書, 1985年), 71頁。
- (12) 河野通明「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」、『ヒストリア』第188号, 2004年), 214頁。
- (13) 註(8) 網野善彦「中世の鉄器生産と流通」, 42頁。